

しまかま

発行 わがまち大田蒲田西地区推進委員会
編集 地域情報紙編集委員会

第3号

わがまちの顔



写真家 横山 宏さん

北海道道東の「幻想と神秘」を追い続ける男がいる。ネイチャーフォト（自然の写真）の第一人者、横山宏氏である。写真誌の審査・講評を務めるなか、北海道の大自然の撮影を続け、「北の大地」のテーマで個展を開催する。

私たちが見るネイチャーフォトの美しさには心が癒される。しかし、そのような自然の創り出す素晴らしい情景に写真家は、めったに出くわさない。一年にたった二、三回だけその瞬間を現す場所もある。写真家はひたすらその一瞬を待ち続ける。新蒲田に住まいをかまえる横山氏であるが、年間のほとんどを撮影地の北海道で過ごす。給油したガソリンが一日で無くなってしまいう程、移動しながらの日々が続く。

知床・阿寒・摩周・釧路など道東に魅せられた横山氏は、当地の撮影を始めてから十四年目

を迎えた。

横浜の根岸で生まれ、豊かな自然の中で過ごした少年時代、横山氏は画家を目指していた。「遊びといえば野原や山で走り回っていた」という体験は、その後、親族の病をきつかけに絵筆とキャンバスがカメラへと変わった後も重要な意味を持つ。

撮影地を南でなく北を選んだ理由は「とてもスリリングであること」そして「子供の気持ちになれるから」と話す。

厳しい自然を相手とする撮影では命に危険が及ぶこともある。たくさんさんの機材を背負いながら雷の中を移動することや、暴風雪に出くわすこともある。そして時には目前でヒグマに遭遇することすらあったと言う。

我々素人の楽しい趣味の写真と、写真家の厳しい仕事としての作品との差について、横山氏は次のように語る。

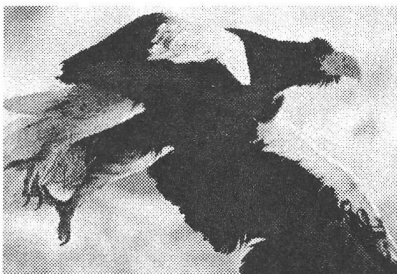
「だれもがシャッターを押すだけで簡単に写真が撮れる時代になった。機材もプロ同様のものを使うことが出来る。そのような中で素人とプロの撮影する写真は、ちよつと違うだけでは済まされない。断然に違わなければならない。」

横山氏に私たちにも出来る、撮影する時の心構えについて尋ねてみた。

- ① 「これだ!」と感じたものがあった時にカメラを向ける
- ② 被写体をよく見つめる
- ③ 感嘆詞「!」が出る瞬間を撮る

皆さんの周りにも、いい被写体がたくさんあるのではないのでしょうか。

(取材 加藤・富田・事務局)



「北の大地」より

浅野忠信という俳優をご存知ですか？

いま日本の映画界で、もっとも輝いている俳優の一人です。名前は知らなくても、テレビコマーシャルで顔はご覧になっている方は多いはずです。

1999年の秋、浅野忠信主演の映画「白痴」が公開されました。当時も現在も話題作・問題作として、浅野忠信ファンのみならず多くの映画ファン・映画関係者のあいだで高い評価をうけた作品です。



時代は第二次大戦中、米軍の爆撃機が落とす焼夷弾による炎の海の中をさまよひ逃げ惑い、極限にある男と女の心理状態を描写しています。とうていかみ合うはずのない二人が交わす会話は瞠目に値します。

この映画「白痴」は、同年の世界各国で行なわれた映画祭に参加出品され、権威あるベネチア国際映画祭をはじめ、ヘルシンキ映画祭、釜山国際映画祭等で高い評価を受け、数々の賞を受賞しています。

さて、この小説「白痴」の原作者が **坂口安吾** です。

蒲西に住んだ無類作家

坂口安吾

(本名・坂口炳五)

一九〇六(明治三九年)

～一九五五(昭和三十年)

坂口安吾は父・仁一郎(当時、新潟日報社長)、母・アサの五男として新潟市で出生しました。

昭和五年当時、旧蒲田区安方町(現大田区東矢口二丁目六番地)に住んでいました。兄・献吉(新潟日報東京支局長、後に社長)の建てた住宅です。今も同所に新潟日報寮が存在します。

同年、同人誌「言葉」を発刊し、処女作「木枯らしの酒蔵から」を発表、続いて「風博士」「黒谷村」の二作を発表して、島崎藤村、牧野信一たちに激賞され、さうとうと文壇に登場しました。

坂口安吾には放浪癖があり、昭和十一年から十五年までの間に各地を転居。昭和十六年に再び安方町に戻りました。

この間、新進女流作家・矢田津世子との恋愛に悩み、この愛を清算するために「吹雪物語」を執筆。戦時下には大胆破格な評論「日本文化私観」を発表しました。

戦後は、日本中が混沌状態のなかで、エッセイ「墮落論」、小

説「白痴」を発表(昭和二十一年)、敗戦という虚脱状態にあった日本人に大きな衝撃を与え、太宰治、織田作之助らとともに文壇の旗手として脚光を浴びました。昭和二十二年、梶美千代と結婚。同時期に「桜の森の満開の下」「不連続殺人事件」「青鬼の禪を洗う女」等、次々と作品を発表しました。

その頃より、原稿書きに追われるプレッシャーのためか睡眠薬・覚せい剤を多用し、やがては中毒症状が現れるようになり、かなりの奇行が目立つようになり、矢口の渡し駅近辺を徘徊している姿を、多くの人々が目撃しています。

昭和二十四年、睡眠薬中毒のため東大病院に入院。その後、静岡県伊東市に転居し蒲田区安方町での生活を終えています。

その後も奇行は続いていたようですが、執筆活動は活発に行なっていました。昭和二十六年には「安吾巷談」で文芸春秋読者賞を受賞しています。

昭和二十七年には桐生に転居し、その地で長男・綱男氏が誕生しました。

それから三年後の昭和三十年、桐生の自宅で脳出血のため急逝しました。享年四九歳でした。

現在、筑摩書房から「全集」「ちくま文庫版全集」が出版されています。

ここで、代表作といわれる「白痴」の内容に簡単にふれておきます。

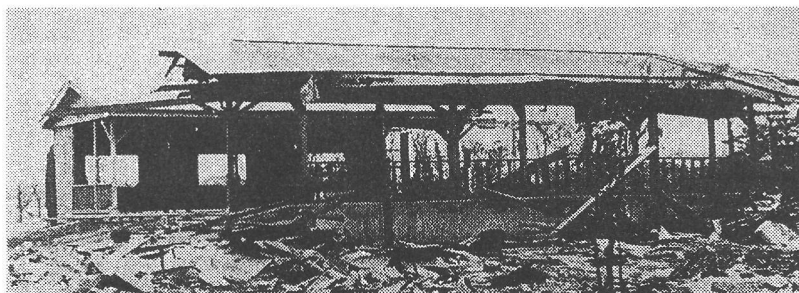
「白痴」は『新潮』昭和二十一年六月号に発表されました。

「その家には人間と豚と犬とアヒルが住んでいたが、まったく住む建物も、おのおのの食物も殆ど変わっていやしい……」の冒頭の一部分が当時の人々の注目を集めました。人間の存在を究極の場所に追いつめて、その存在を描いた作品です。

精神のない肉体「白痴」の女性を抱いて空襲下を逃げ惑う主人公。特異な状況下で交わされる彼女との真実の会話。難を逃れ一命をとりとめた後に襲ってくる挫折と虚無感……

安吾は男女間の愛情について、肉体と精神との対立する狭間に苦悩する自分自身を描いているのではないのでしょうか。

小説「白痴」の舞台となっている場所は、蒲田西地区付近、特に東矢口周辺と特定できます。クライマックスの最後の空襲部分に焦点を絞り、当時の蒲田区安方町周辺の地理的、また時間的な環境の検証を試みてみました。



矢口の渡駅（昭和22年）大良美雅氏撮影

〈本文〉『それは四月十五日であった。その二日前、十三日に、東京では二度目の夜間大空襲があり……』
〈検証〉昭和二十一年四月十三日、東京は大規模な夜間空襲を受けた。特に大田区を中心に大きな被害があり矢口の渡駅から多摩川土手まで見通せるほど焼け野原となった。



坂口安吾氏
新潮日本文学アルバムより

〈本文〉『二人は肩を組み、火の海を走った。二人はようやく小川のふちへでた。(中略)小川の両側の工場が猛火を吹き上げ……』
〈検証〉このあとに登場する矢口国民学校の東側に、幅・深さ共に一間(二・八m)の通称大ドブに三〇センチ位の深さで下水が流れていた。現在はずべて暗渠となり緑道になっているが、付近は今でも町工場が多い。

〈本文〉『群集は尚えんえんと国道をながれていた……』

〈検証〉矢口国民学校の西側が京浜第二国道で、南下すると木造の多摩川大橋が架かっていたが、この空襲で両岸より火の手があがり多くの死傷者と共に燃え落ちた。

〈本文〉『数人の巡査が麦畑の中を歩いて解除を知らせ(中略)蒲田署管内の者は矢口国民学校が焼け残ったから集まれと……』
〈検証〉昭和二十四年に池上警察が出来るまで、この地区は蒲田

警察署管内であった。また奇跡的に焼け残った矢口国民学校は、現在の矢口小学校そのものである。付近の公共施設で、唯一、難を逃れた矢口国民学校は一時的に警察や区役所などが仮設の官舎とした。

以上、「白痴」の一部を取り上げてみたが、この他にも随所に東矢口の情景を想い起こさせる場面が出てきます。

女の子の手をとり猛火の中を逃げ惑う最後のシーンは、まるで映画を見ているようなリアルな描写です。本人が実際に遭遇し体験しなければ書き得ない緊張感と迫力があります。それは地理的条件とも重なり、まして地元で空襲にあった人たちにとっては、小説以上の何か、例えば空襲の恐怖の共有感を思い起こさせるのではないのでしょうか。

(取材 江尻・鐫木・市石)

参考文献

『新潮日本文学アルバム』

新潮社

『写された大田区』

大田区郷土博物館

『新潟日報』

一九九八年十月二五日号

新潟日報社

『大森・蒲田ことがら事典』

城南タイムス社

わが自治会の沿革

西蒲田二・三丁目自治会長

鈴木 廉士

私たちの自治会は東急池上線蓮沼駅の北約三百m、七百mに位置しています。さらに北方約五百mには池上本門寺の台地の森があり、町内は基盤の目の様に区画整備されています。

保育園・児童館・小学校・中学校・高校と、子供たちにとっては町内にいながら良好な教育環境となっています。

今から五十一年前、昭和二十六年頃は住宅も疎らで田畑が点在し、蛙の鳴き声が其処此処に聞こえていました。

そんな頃、少人数ながら蓮沼一・二丁目自治会が発足しました。地名の通り昔は蓮の沼が多く、時季には蓮の花がきれいに咲いていたと伝えられます。

当時は戦後間もないことで、戦乱の傷跡が残っていました。日赤奉仕団大田分団の事業活動を重点に、池上・蒲田両防犯協会に籍を置き治安活動を推進してきました。

その後、諸情勢の変化により昭和三十一年に会としての本規約

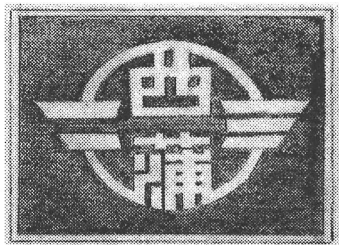
を作り、蓮沼二・三丁目自治会と改めました。会員を募り会費を徴集して本格的な組織の拡大を計り、現在の自治会基盤となっています。

昭和三十四年九月に女塚小学校から分離し、蓮沼小学校が児童数五三一名で開校しました。

八年後、昭和四十二年五月一日、大田区施行の住居表示の変更により、蓮沼名から西蒲田二・三丁目自治会と改名し現在に至ります。

最近では住民の移動が激しく、自治会員数が年々減少しているのは残念です。

昨秋十月に自治会創立五十周年記念行事を執り行ないました。記念の印しとして後世に残る子供興を新調して祝賀式典に花を添えました。



後日、「西蒲田二・三丁目自治会創立五十周年の歩み」を発行し、記録資料をもとに計画しています。

事務局からのお知らせ

午年の二〇〇二年が明けて三ヶ月。年頭に立てた抱負・目標は順当に進んでいますか。

今年は、ソルトレイク冬季オリンピック開催に加え、ワールドカップサッカーの日本出場の大舞台も控えています。日本選手の活躍に期待したいものです。今回の「わがまちの顔」・道東

の幻想と神秘を追い続ける写真家・横山宏さんの作品を蒲田西特別出張所に展示しています。是非ご覧ください。

情報紙「かまにし十七」をさらに皆様の身近なものとしていただけるよう編集委員の皆様とともに努力してまいります。

蒲田西特別出張所管内

人口	男	29,419人
	女	27,258人
	計	56,677人
世帯	28,344世帯	

平成14年1月1日現在

編集後記

今回の特集「坂口安吾」については、創刊号発刊後から数ヶ月にわたる取材・編集のすえ、読みごたえのある特集になったと自負しております。

坂口安吾は、この度の取材で蒲田西地区（特に矢口界限）での生活の中、かなりの奇行が目立ったようですが、執筆活動はとても活発でした。

前号より始めました『わがまちの顔』に写真家・横山宏氏にご登場いただきました。

大変多忙な中、横山氏に日程の都合をつけて頂きインタビューを快諾して頂きましたことを、この編集後記の紙面で改めて御礼申し上げます。

これからも「かまにし十七」をより充実した紙面とするために、特集・わがまちの顔・ホットなニュースなど、皆様方からの話題の提供をお待ちしております。

情報紙に対するご意見・ご感想などを事務局までお寄せください。

事務局

蒲田西特別出張所

大田区西蒲田七-十二-七
三七三二-四七八五